

「多文化社会とコミュニケーション」愛知県立大学（2019年度）
第13回 「「コミュニケーション能力」ですって？」

あべ やすし

<http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tabunka2019/>

今回は、コミュニケーションを関係性や環境の問題としてとらえなおし、「コミュニケーション能力」という概念について問いなおしてみたい。

ラーニング・コモンズーコミュニケーション、共同学習を促進する大学図書館の試み

現在、タバコに対する社会の認識が変化し、公共空間における喫煙が制限されるようになってきている。飲食店でも「分煙」がすすみ、喫煙者と非喫煙者の空間をわけている。図書館においても、そのように「会話をしてもいい空間」と「だまって本をよむ空間」をわけることで、図書館の利用方法をひろげることができる。たとえば、大学図書館における「ラーニング・コモンズ」の試みは、図書館におけるコミュニケーションや共同学習を促進しようとするものである。

情報の電子化がすすむなかで、図書館の資料も電子化がすすんでいる。多くの学会誌や大学紀要が電子版を公開するようになってきている。また、本は印刷版と同時に電子書籍版も販売されるようになってきている。こうした流れが進行すれば、図書館の蔵書のほとんどが電子化されることになる。そうなれば、大学図書館の存在価値が問われることになる。ただ単に資料を保管し、読書スペースを設けるだけでは大学図書館の利用価値がなくなってしまう。そこで注目されたのが、人的資源である。つまり、図書館という場における学生同士の共同性やコミュニケーションに価値を見いだしたのである。

ここでは名古屋大学図書館のラーニング・コモンズのサイトをみてみよう (<https://lc.nul.nagoya-u.ac.jp>)。「ラーニング・コモンズの利用方法」のページでは、つぎのように説明している。

ラーニング・コモンズは学習のための会話が可能な空間です。静かな環境で学習したい方は他のフロアをご利用ください。設置PC はメディア教育システムのネットワークに接続されており、サテライトラボのPC と同等の構成です。CALL（語学学習）システム*も利用できます。また、全エリアで無線LAN（NUWNET）が利用できます。
*ヘッドセット貸出可。サービスデスクに申込み (<https://lc.nul.nagoya-u.ac.jp/howto/>)。

また、「学習サポート」というページでは、学生が受けられる学習支援について、つぎのように説明している。

大学院生のサポートスタッフが、パソコンの使い方、調べもののコツ、レポートの書き方などのご質問にお答えし、皆さんの学習をサポートします。中国語・英語での対応も可能です。総合サポートカウンターでご相談ください。メールサポートもご利用いただけます (<https://lc.nul.nagoya-u.ac.jp/support/>)。

学生同士の交流や共同学習をうながすような空間づくりをするだけでなく、学生が必要とする学習支援を提供している。大学図書館を「学習の場」として位置づけ、設計からサービス内容まで、イチからつくりなおしたのである。

わたしが見学した新潟大学図書館のラーニング・コモンズスペースでは、ファミリーレストランの席（ソファー）のような対面席が設置してあったり、語学練習用のパソコン席が設置してあり、会話したり声をだして練習したりすることができるようになっていた。現在、たくさんの大学が図書館を増改築し、ラーニング・コモンズの導入をすすめている。なお、愛知県立大学の図書館でもラーニングコモンズのような空間が設置されているが、図書館がせまいがゆえに、のびのびと会話できるような環境にはなっていない。

現在、大学においてこのようにデザインを工夫することでコミュニケーションを促進させようとする取り組みがある。しかし一方では、学生に対して「コミュニケーション能力」を身につけることを要求し、それが教育課題であると主張している状況がある。

「コミュニケーション能力」ってなに？

現在、なぜ学生は「コミュニケーション能力を身につけるべきだ」とされているのか。おそらく、企業への就職を念頭においての議論である。しかし、「コミュニケーション能力がない」「たりない」というのは、なにを根拠にしているのだろうか。その評価は、だれがしているのか。だれなら「コミュニケーション能力」を判定できるのか。コミュニケーション能力のない人というのは、どういう人を想定しているのか。

ここで、貴戸理恵（きど・りえ）による『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに』という本を紹介したい。貴戸はつぎのような問題意識から出発している。

…他者や場との関係によって変わってくるはずのものを、個人の中に固定的に措定（そてい）することを、「関係性の個人化」と呼んでみましょう。学校や職場という、人と人が出会い関係を築いていく場において、私たちはしばしば、「あの人はコミュニケーション能力がある／ない」などの言い方で周囲の人を評価し、「関係性の個人化」を行っています。

けれども、こうした文脈依存的にしか見出すことのできないものを、「能力」という個人化された言葉で表現することは、どのくらい適切なのでしょう。そこに問題はないのでしょうか（きど2011:3）。

いいかえれば、「コミュニケーション能力」というものは「他者や場所との関係によって変わってくる」ものであり、個人化することはできないということだ。だれが、だれと、どのような状況でむきあっているのか。その文脈をはなれて「コミュニケーション」を評価することはできない。コミュニケーション能力とは、性格と同様に環境や関係に左右されるものである（性格については、第1回配布プリントを参照）。

積極的であるべきだ？

現在、「コミュニケーション能力」の向上がさげばれ、自主性や積極性が重視されている。「積極性が強要されている」という、矛盾した状況にある。

仲潔（なか・きよし）は日本の英語科教育で「コミュニケーション能力の育成」が教育目標としてかけられている現在の状況を分析しながら、つぎのように問題を指摘している。

積極的になれない学習者に対し、「積極的になれ」と繰り返しても、効果が期待できないばかりか、むしろ疎外感を覚えたり、居場所を失ってしまったりしかねない。ところが、教育場面である限り、積極的であることが評価の対象となってしまう。そのため、場合によっては、自らの居場所のなさ／居心地の悪さを隠し、積極的／自発的に、コミュニケーション活動／言語活動を楽しむふりをする学習者もいるだろう。あるいは、学習者によってはそのように振る舞うことさえできず、コミュニケーションそのものを遠ざけてしまう危うさもある（なか2012:15）。

そもそも人間には積極的になれる状況と、そうでない状況がある。その場が自分にとって心地よい環境であれば、安心して積極的になれる。しかし、そうでなければ積極的になることはむずかしい。その適応／不適応を個人の問題として、能力の差のようにとらえてしまえば、たまたまその場に適応できている人だけを評価することになってしまう。さらに、じっさいに評価がくだされ「積極的でいいですね」とほめられたり、逆に「もっと積極的にならないと」と声をかけられたりするうちに、その評価を内面化して自己規定してしまうかもしれない。

とくに学校という公共の場で「積極性」を重視するのであれば、各自が「自分なりに」積極的になれる環境をつくっていくことが教育の課題となるのではないだろうか。大学図書館のラーニング・コモンズは、まさに学生同士のコミュニケーションを促進するための環境整備といえるだろう。

コミュニケーションって、なんだろう

岩川直樹（いわかわ・なおき）は「コミュニケーション教育」という「システム」の問題をつぎのように指摘している。

「コミュニケーション教育」は問題を個人としての子どもの「能力」に還元するばかりか、その「能力」をあれこれ断片的な「スキル」にまで解体する。本来、かかわりや場といった生きた関係から切り離せないはずの問題が、関係から孤立させられた個人の「能力」の問題に還元され、さらに、本来、からだごとごとばがひとつに

なったトータルな存在の変容にかかわるはずの問題が要素的な「スキル」の有無にまで断片化される（いわかわ 2008:5-6）。

人間やコミュニケーションを断片化するのではなく、「かかわりや場といった生きた関係」を問いなおすなかで、コミュニケーションとはなにかという問いをふかめていくことができるのではないか。岩川は、教育の課題をつぎのように論じている。

いま、私たちに必要なのは、あれこれの一般的な「コミュニケーション教育」の手法を開発普及することではなく、眼の前の子どもたちの現実と向き合うなかで「コミュニケーションとはなにか」、「教育とはなにか」、「社会とはなにか」という問いを掘り下げ、それらのあいだの根源的なつながりを見つめ直すこと、かかわりのなかでなにかを越え、越えることによってなにかを分かち合う「コミュニケーションとしての教育」という実践そのものを、それぞれの持ち場から呼びかけあうことにあるのではないか（4ページ）。

逆にいえば、「コミュニケーション能力」の向上を教育目標にかかげる議論の問題は、そもそも「コミュニケーション能力」とはなんなのかという問いを回避していることにあるといえる。企業が若者に対して、「コミュニケーション能力をつけなさい」と要求するとき、そこでは反論の機会がうばわれている。若者が企業に対して問いを発するという状況が想定されていない。それは、「評価する側」と「評価される側」を規定し、その関係を固定しているからである。企業が若者に「コミュニケーション能力をつけなさい」と命令することができるのは、自分たちが権力や既得権をにぎっているからである。

そもそも、コミュニケーションとは、なんなのか。そうした疑問をなげかけることのできる場をつくっていくことが重要なのだといえるだろう。「正解」をみつけることよりも、それを議論することに意味があるということだ。

「コミュニケーション障害」を問いなおす

現在、「コミュ障（こみゆしょう）」ということばが若者のあいだで流行語になっている。「コミュニケーション障害」の略語である。「コミュニケーション能力」と同様に、この「コミュニケーション障害」という概念にも、問題を個人化する視点がふくまれているといえる。

コミュニケーションは、「おたがいさま」である。そのようにとらえてみると、いわゆる「コミュニケーション障害」というのは一方的な議論であることに気づく。たとえば、鯨岡峻（くじらおか・たかし）は「コミュニケーションの障害」を「機能障害」の問題におしこめることに疑問をなげかけ、つぎのようにのべている。

私たちはコミュニケーションの障害を子どものもつコミュニケーション機能の障害として子どもに帰属して考えがちですが、どこまでが子ども「本来の」障害なのでしょう。障害と捉えていることのなかに、子どもと関わる人（自分）との関係が難しくなっていることが含まれていないかと問うてみると、答えにくい場合がしばしばあるのに気づきます。…中略…私たちは暗黙のうちに健常者の機能を基準にとり、それに達している、達していないで「障害」を考えてきていたことが示唆されます。…中略…「コミュニケーションの障害」はもっぱら障害をもつ人の機能に帰属される問題として考えられるべきではありません。むしろ二者の関係が差し当たり難しくなっているという、より広い意味において考える必要があるのではないのでしょうか（くじらおか1998:174-175）。

だれが接するかによって、「その子ども」の行動が変化することがある。それは関係性が両者の行動に影響をあたえるからである。ふだんから接している人と対面すれば、おちついていられる。一方、病院という、日常とは異質な空間で初対面の医師が接するときには緊張するだろう（逆に、医師や看護師は、病院での勤務が日常化することで、病院が異質な空間ではなくなり、緊張感がほぐれていく／うすまっていく）。あたりまえのことだ。しかし、そういった要素をいっさい考慮せずに、ただ「この人はコミュニケーション障害だ」というのは不公平ではないか。そこでは、困難な状況をいっしょに解消するという視点がない。おたがいさまという視点がないのだ。

能力の共同性へ

竹内章郎（たけうち・あきろう）は、「そもそも、能力が個人の私的所有物だ、という感覚自身が疑わしい」とのべている（たけうち2007:131）。そして、竹内は知的障害者や認知症の高齢者の「伝達能力」についてつぎのように説明している。

…知的障がい者や認知症の高齢者も、たとえ部分的にせよ、立派に自分の体調や欲求を、周囲に「伝達」しています。けれどもこの「伝達」は、ふつうの言葉がしゃべれない彼らの言語能力（私的所有物）だけによるものではありません。彼らと接する優秀な指導員による人的サポートがあってこそ、この「伝達」も実現するのです。つまり、こうした優秀な指導員が音声や繰り返される同じ単語から、障がい者たちの体調や欲求を読み取るからこそ、彼らの「伝達」能力が成り立つのです。…中略…優秀な指導員がいるか否か、またそうした指導員を育てる仕組みや社会・文化があるのか否かで、そんな「伝達」する能力は実現したりしなかったりするのです。つまりはこの「伝達」する能力も、個人の私的所有物としてのみあるのではなく、指導員などの他者と知的障がい者たちとの関係の中にあるのです（140ページ）。

竹内は、こうした視点を「能力の共同性」とよんでいる（141ページ）。ここで重要なのは、たがいに協力しあうことによって、そのふたりやグループがどのような関係性をきずき、コミュニケーションをつむぐことができるかということである。

たとえば、肥後功一（ひご・こういち）は「コミュニケーション障害を産み出す見方」という論考で、「“できない（依存）”と“できる（自立）”との間には」「“いっしょに〇〇する（共同性）”という世界が豊かに広がっている」と指摘している（ひご2000:37）。できる／できないを「自分の力」でできるかどうかで判断する視点が、障害を「個人の問題」におしこめてしまうのである（あべ2011、2015）。

完全に依存するのでもなく、たったひとりで孤立するのでもなく、そのあいだを生きるということ。それが可能になれば、生きやすくなる人は、たくさんいるだろう。

「はなしをきく」こと、「いやだ」「たすけて」といえる関係であること

それでは、コミュニケーションにおいて重要なこととはなんだろうか。最低限必要なのは、「相手のはなしをきくこと」、「いやだ」「たすけて」といえる関係であることだろう。

どうすればいいか、わからないときは「どうしたらいいですか？」と相手にきく。

「いやだ」と感じたとき、「それはおかしい」と感じたときは、それをつたえる。表現する。

こまったときは「たすけて」という。それができる関係、環境をつくる必要がある。

積極的にコミュニケーションをすることだけが「いいこと」ではない。必要なときには「コミュニケーションをとじる」こともある。「ひきこもる」のも、ひとつのコミュニケーションである。拒否することがあってもいいのだ。

事故や「ヒヤリハット」を報告しやすい職場環境とは、どのようなものなのか。利用しやすい図書館とは、どのようなものなのか。学生が発言しやすいようにするためには、なにが必要なのか。人数配分や空間の配置をどうすればいいのか。そうした、環境への視点がもとめられる。「個人の能力」の問題にしてしまうのは不公平である。

参考文献

- あべ・やすし 2011 「言語という障害—知的障害者を排除するもの」『社会言語学』別冊1、61-78
あべ・やすし 2015 『ことばのバリアフリー—情報保障とコミュニケーションの障害学』生活書院
猪谷千香（いがや・ちか） 2014 『つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み』ちくま新書
岩川直樹（いわかわ・なおき） 2008 「コミュニケーションと教育—〈からだ・場・社会関係の織物〉の編み直しの方へ」『教育』7月号、4-11
大和田敢太（おおわだ・かんだ） 2018 『職場のハラスメント—なぜ起こり、どう対処すべきか』中公新書
加藤信哉（かとう・しんや）／小山憲司（こやま・けんじ）編訳 2012 『ラーニング・コモンズ—大学図書館の新しいかたち』勁草書房
貴戸理恵（きど・りえ） 2011 『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに』岩波書店

貴戸理恵 2018 『「コミュ障」の社会学』 青土社

鯨岡峻（くじらおか・たかし） 1998 「関係が変わるとき」 秦野悦子（はたの・えつこ） / やまだ ようこ 編 『コミュニケーションという謎』 ミネルヴァ書房、173-200

ショー、ビクトリア（小形恵訳） 2008 『がまんしないで、性的な不快感—セクハラと性別による差別』 大月書店

竹内章郎（たけうち・あきろう） 2007 『新自由主義の嘘』 岩波書店

仲潔（なか・きよし） 2012 「〈コミュニケーション能力の育成〉の前提を問う—強いられる〈積極性／自発性〉」 『社会言語学』 12号、1-19

永嶺重敏（ながみね・しげとし） 2004 『〈読者国民〉の誕生—明治30年代の活字メディアと読書文化』 日本エディターズスクール出版部

中村高康（なかむら・たかやす） 2018 『暴走する能力主義教育と現代社会の病理』 ちくま新書

肥後功一（ひご・こういち） 2000 「コミュニケーション障害を産み出す見方」 大石益男（おおいし・ますお） 編 『改訂版 コミュニケーション障害の心理』 同成社

平田オリザ（ひらた・おりざ） 2012 『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』 講談社現代新書

藤田康文（ふじた・やすふみ） 2008 『もっと伝えたい—コミュニケーションの種をまく』 大日本図書

問いかけ

・授業で「グループワーク」などというものがあるが、お膳立てをして強制的に話しあいをさせることにどのような学習効果があるのか？ 授業内容が刺激的で中身のあるものであれば、授業のあとの帰り道などに、グループワーク的な意見交換が始まるのではないのか。グループワークは、教育実践として成功しているか。

・SNSや携帯電話による連絡手段は、コミュニケーションツールとして広く普及している。ラインやツイッター、そのほかのSNSや掲示板を利用することに、どのような長所、短所があるか。よかったこと、トラブルになったことなど。

コメントの紹介

今回のことばに関する講義内容から、昔テレビでやっていた「ファニエスト外語学院」を思い出しました。ボビー・オロゴンが有名ですが、色々な国からやってきた、まだ日本語がうまく話せない人たちを集めて、まちがえたり怒られているのを見て笑いを誘う内容です。確かにものすごく面白かったのですが、逆の立場だったら…と考えるとすごく嫌な気持ちになりました。一生懸命学んでいる言語を使っているのにその言語を母語とする人々の笑いにされるなんて、私だったら相当傷つきます。（テレビだからわざとやっているのかもしれないですが…。）日本ではこうやってうまく日本語を話せない人の日本語を聞いてすぐに笑ってしまいがちですが、他ではそうでもないように思います。単なるイメージかもしれませんが、私が留学に行ったとき、つたない英語を話しても誰1人笑って訂正することなどなく、一生懸命話していることを理解しようとしてくれていました。すごく嬉しかったのを覚えています。…後略…

英語教育学の授業で“World Englishes”について学びました。英語には本当に様々なバラエティが出てきていますが、そのバラエティは元を正せば「間違った英語」だったはずですが。シンガポール英語は一般に“Singlish”（“Singapore + English”）と呼ばれたりしていて、イギリス英語やアメリカ英語と並んで1つの英語のバラエティに認められつつあります。ですがシンガポール英語は他の言語を強く受けていて“You are ~ ma?”というだけで疑問文になります。（中国語の「吗？」由来）日本語だと、“You are ~ ですか？”と言うことです。これが英語として認められるのは、もっと言えばこの英語が学校で教えられるのは、本当に良いのでしょうか。…後略…

【あべのコメント：問題ないです。たとえばシンガポールに駐在する人には必要です。「学校で教えていいのか」というのは、シンガポールの人とコミュニケーションをとることを「本当に良いのでしょうか」などと問うのと同じ（「赤いカエルはカエルとして間違っている」というのと同じ）。カタカナ英語（日本英語）だって、日本で生活しようとする英語話者は学習しておくとかかなり便利でしょう。ダグラス・ラミスが「イデオロギーとしての英会話」で指摘しているように、「あなたが誰に話したいかという問題」なのです。言語接触によって他の言語の影響をうけることなんて、あたりまえのことです。英米の英語だって、変化しつづけてきたのであって、英米の英語を「無色透明」のように見なし、ほかの英語を「色モノあつかい」してはいけません。それが社会言語学的な言語観です。たとえば、近代以降、英語の文献を日本語に翻訳していくなかで、英語的な日本語文体（翻訳文体）が誕生しましたが、それを「日本語として教育していいのか」だ

なんて、いいませんよね。たとえば「なにが彼女をそうさせたのか」という日本語文を例にすると、「彼女」という語も、その文法的ありかたも、翻訳によって誕生したもの。】

学校で教える英語をどの地域の英語にするか、というのは選択の問題であるとしても、教える側にとってのものであり、私たちのものではありません。たんとと教えられるのはアメリカ英語、ALTの先生の国籍はバラバラ、テストで流される英語もバラバラ。私たちに選択の余地はありません。それらはきく英語がバラバラということですが、様々なものをきくことは、いろいろなる人種の人々がいる社会で、「伝わる英語」を話せるようになる可能性がある、という点では有用だと思います。与えられたものにしか、教えられる側の選択肢はないと思います。…後略…

【あべのコメント：なるほどと思ったのですが、語学というのは「教えられる」だけで完結するのではなく、テストも受験も関係なく、自主的に学習するものですよね。音楽、映画、ドラマ、本など、あらゆる手段をつかって。わたしは中高とそういうふう英語を学んでいたし、そこにはあきらかに、よくも悪くも、「選択」がありました。】

…よく、日本人は英語を話すとき、しっかり文にしようとするので、逆に話しづらくなっていると聞きます。…後略…

【あべのコメント：そういうことではないと思います。たんに、話しことばのインプットが少なすぎるだけでしょう。たとえば話しことばでは、2語だけで返答するというのは、ものすごくたくさんあることです。しかし、文法を身につけるための例文ばかりを読み書きするレッスンばかりを受けているから、「Over there.」「That's it.」「Terrific.」などのような語をインプットする機会がない。何語を学ぶにせよ、自分でインプットしつづけるしかありません。しっかりインプットしていれば、パッと口からでるんです。インプットに時間をかけていなければ、しゃべれないのは当然。】

学校で教えられる英語がほぼアメリカ英語なのも教育者側の意図がはたらいているものなのかな、と思いました。私の高校のALTはイギリス人でした。1人の英語の教師が、ALTがいない時「彼の英語は参考にしすぎない方がいいよ。イギリス英語だから」と言ったことがあり、イギリス英語が好きな友人がとても憤っていたことを思い出しました。教育の場において便宜的に一つの言語を使うことは必要かもしれませんが、他の言語を切り捨てるような発言はしてほしくなかったなと思いました。…後略…

私は中学1・2年生のときにカナダの学校に通っていました。なので、アメリカ英語ではなく、カナダ英語でずっと話していました。日本に帰ってきて、定期テストがあり、カナダ英語のスペリングで解答しました。その時私は“color”という単語を“colour”と書いたのですが、スペリングミスということでバツにされていました。私は先生に「カナダ英語だとcolourというスペルですがだめですか」と聞いたら、今回は丸にするけど次からは学校で習ったスペルで答えるよう言われました。正直納得いかなかったのを今でも覚えています。…後略…

【あべのコメント：マニュアル的にしか対応できない言語力しかない人が教員をしているということです。ある程度はしょうがないことでもあるでしょうけど。英語のバリエーションにくわしくないと英語の教員になれないということにすれば、英語の教員になれる人がかなり少なくなってしまう。それにしてもね。イギリス英語だってcolour。】

「ぼうけんに挑む」と聞いて、普通思い浮かべるのは「冒険」であるだろう。しかし、小学生の私は何と考えたか、テスト用紙には「暴犬」と書いてしまった。その時は、出題範囲が決まっていたのでxにされたことに特に文句はなかったが、「冒険」と答えさせたいのならば「～に行く」とか、「～をする」とかにしてくれれば良かったのにと考えた。

私が「腹」などという言葉を使うと母から「女の子なんだから」と直されることがよくあります。…中略…大学に入って独語を学んでいると周りの人に「なんでドイツ語？英語じゃないんだ。」とよく言われます。確かに英語話者は多いけれど英語ができる人が別の言語を学ぶというルールもないはず。…後略…

…友達が、あまり話さないタイプでした。でも、仲良くなったら、「実は出身が愛知県でなくて、大阪だから、あまりみんなとは話したくない。大阪弁が出ちゃうから。」とっていました。大阪弁が出ると、すごく珍しがられるし、「話してみて！」と言われるのが嫌だったようです。遊びに出掛けて、電話が家族からかかってきたときに、彼女は急に大阪弁をつかってガツガツ話し出したので、本当は話したかったんだと分かりました。彼女によれば、授業でもたまに先生が何を言っているのか方言の関係で分からないこともあるそうで、私に説明を求めるときもありました。…後略…

方言ってどういう風にできたのか気になります。県ごとにいるんな方言があって、県内の細かいところでも方言があって…方言ってというのはいつから出来上がったのかとか、全然わかりません。元々標準語というものがあるのに、どうしている方言ができたのかなって思います。…後略…

【あべのコメント：「元々標準語というものがある」とは？そこでいう「元々」とはどういう意味ですか？ないです。むかしは、ラジオもテレビも、鉄道も、「都道府県」も、なかったですよ。近代になって、「ひとつの国をつくる」というときに、共通のことが必要だといって「標準語」というのをつくったということです。そういうものをつくらないと話が通じないからです。たとえば1000キロはなれている人と、通信手段もなく、顔をあわす機会もないのに、同じようなことばをはなすということはありえないでしょう。必要もないし、方法もない。】

…私自身栃木出身で、この大学に来て特にめずらしがられることが多くなった。その際に「方言あまり出ないね！」だとか「U字工事みたいな方言話してよ！」など方言について馬鹿にされている気持ちになって何度か不快に思った。…後略…

【あべのコメント：にたような話で、〇〇語をはなせるといったときに「はなしてみよ」という人がいますね。】

テレビのバラエティ番組で、青森をはじめとした方言の強い東北地方の方々にわざわざインタビューを行い、下に字幕をつけている（このことは目的がはっきりしている分には構わないが）。しかし、その字幕が記号であったり、何を言っているのか分からないと笑ったりしているのは、一視聴者としては、面白いとは感じず、ただただ不快だった。分かりにくいからと、字幕をつけるだけにすればいいものを、面白さ、ウケ狙いで東北の方を選び、笑いものにしようとするその意図が理解できなかった。それを見たインタビューを受けた人はどのように思うのだろうか。…中略…みんなが見ることのできるテレビだからこそ、そういったことはやめてほしいと思った。

「鍵をかう」の「かう」は「犬を飼う」の「飼う」と同じイントネーションで言っています。（あべ先生風に言えば「かう→ミド」となるのでしょうか。）…後略…

…大学に入ってすぐ履修する授業の話をお聞きしました。私はK-POPが好きで大学に入ったら第二外国語は韓国語を絶対にとる、と決めていたのに、看護学部は中国語、スペイン語、ポルトガル語の3つからしか選べないことを知り、衝撃を受けました。他学部は韓国語を選択できるのでどうして看護学部は選択できないのか。大学が決めた言語の優先順位に従わざるを得ないのが悔しいです。学部関係なく平等に選択肢を与えてもいいのでは、と思います。…後略…

【あべのコメント：看護の現場で使う場面がありそうな言語3つ、という感じですね。「卒業単位」にはならなくても、履修希望をだせば履修はできるんですよね？そもそも看護学部は必須科目が多くて大変でしょうけど。2年から守山キャンパスがメインになるとか、そういう面でも他学部の授業を履修するのはハードルが高いのかもですね。】

…私は両親が両方関西出身ですが、小学校の頃から名古屋に住んでいるので、気がつかないうちに“学校では名古屋弁、家では関西弁”とつかい分けるようになっていました。幼心ながらも、みんなと違う言葉はいやだと思ったのかもしれない。…後略…

岡山弁はきたない、名古屋弁はきたないとよく言われるけれど、そもそもきたないとは何を基準にそう言っているのか。この時点で、そういう方言を正しくない言葉と解釈してしまっている気がする。

…“男性が女性に使ってほしくない「言葉遣い」”という特集に関しては、正直『うるせえ！お前に言われたくないわ！』という感想です。（※うるせえ、お前：ランクイン）…後略…

私のクラスメイトに自分のことを「おれ」ということばで言う女の子がいたのですが、それを聞いた人たちが「なんで“私”ではなくて“おれ”を使うのだろう？女の子なのにおかしい」と話していて、それを聞いて私は女の子だから私を使い、男の子だから僕あるいはおれを使うのが当たりまえだという概念にとっても違和感を感じたのをおぼえています。実際に、人前で発表などを行う時は男の子でも“私”ということばを使うことが多いと思うので性別によって使用することばを分けるべきではないと思いました。…後略…

【あべのコメント：伝統的に女性も「おれ」とか「おら」といつてきた地域もあるんですよ。使用されなくなっていますが。】

…国語学のある授業で、こんな質問をされたことがあります。「Q テスト問題で、解答を方言で解凍したら、○ですか？ ×ですか？」という質問です。（主に文章で解答するものです。）わたしはその時、「方言は話し言葉で、話し言葉は解答には適していないから×じゃないか？」と答えました。今日の漢字テストについての映像を見て、そのことをふと思い出しました。「方言は書き言葉ではない」というのは割と標準語に近い言語であるわたしが勝手にそう思い込んでいることであって、三河弁以外の方言をしゃべる人だったらまたちがう考えになるのかなあと、今改めて思います。…後略…

【あべのコメント：「書きたい」という動機をもつ人がでてくれば、そのコミュニティでどんどん書きことばとして流通していくので、そうすると、またちがった状況になります。そのとき、そもそも「方言」という位置づけには満足できなくなる人が多くなるでしょう。そんなふうな「自分のことば」を大事にしようとする人がでてきた歴史が世界のあちこちにあります。なので、「テストで、わしのことばで書いて、なにがいけんのんじゃ」という主張がでてくることだって当然ある。】

…テレビで沖縄のお年寄りの方の会話を耳にしたことがあるんですが、もはや何語！？ってくらいわからなくて、これって日本語なの…？と少し疑問に思ったことがありました。でも沖縄語という表現は聞かないし、言語や方言ってとても不思議なものです。…後略…

【あべのコメント：沖縄語、琉球語、琉球諸語、うちなーぐち、しまくとぅば など、さまざまな呼称が現にあります。たとえばYouTubeで検索してみてください。】

…名古屋弁の人は簡単に言うことができる有名な文があります。『キットカット買っとかんといかんかったのに、あんたが買ってこんかったから、いかんかったんだがあ〜』という一文です。…後略…

【あべのコメント：かなり広い地域の人が、かまずにいえると思いますよ。否定を「-anai」ではなく「-an」という地域が広いので。「いく」→「ik-anai（いかない）」／「ik-an（いかん）」。岡山市の人なら「キットカットこーとかんとおえんかったのに、あんたがこーてこんかったけー、おえんのんじゃがー」かな。最後の部分、直訳すると「おえなんだんじゃがー」だけど、なんか違和感。通常なら、名古屋でも「いかんのだかー」というのでは？ しらんけど。】

Wordでレポートを作っていると“ら抜き言葉”があると下に波線がつく。Wordは“ら抜き言葉”が“ことばの乱れ”だと考えられているんだなあとと思った。

…「高」と「髙」は何がちがうんだろう？

【あべのコメント：異体字といいます。手書きで、いろんな形が発生してきたのです。「令」と「令」は書体のちがいです。】

…たしかにパソコンとか文書でもフォントによって変わってくるから、緩い基準で合っていると思う。

…どうして楷書でないといけないのか疑問に思ったことがあります。正誤つけやすいからであってまちがってないのでは？と思ったこともあります。“正誤つけやすいから”で定義されると学校・教育の方針を疑問に思わざるを得ません。

【あべのコメント：書道をしていた人は、草書や行書も身につけていたりして、楷書だけに限定されると不利になりませぬ。】

…日本では履歴書は手書きで書く場合も多いと思うから、正確に漢字をかけるということはプラスに働くのかなと思う。

【あべのコメント：わたしは、「履歴書は手書きで」という風習をやめさせたいと思っています。】

私は使うことばを修正されると困ってしまう。両親が福岡県と岐阜県の出身かつ、自身が三重県桑名市生まれの四日市市育ちであるため、方言の強い親戚や友人の話し方の影響を強く受けて育ってきた。親に博多弁と岐阜弁が混ざっているとされたこともある。自分自身ことばがメチャクチャなのは自覚しているし、方言は自分の特徴を示すものだと思っている。しかし、以前とあるセミナーに出席した時、ことばのイントネーションを注意されたことがある。仕事は標準語でしろと言われた気がした。私はそのセミナーで言われたことを無視して、忘れることにした。目上の人に対してていねいなことばを使うことは心がけて、イントネーションはそのまま話している。「えらい」疲れた時に使うだけでなく、強調する時にも使っている。…後略…

【あべのコメント：これまでも、これからも移動すること、周囲の影響などで「自分のことば」は変化していくことはあります。ふっきれることが大事ですね。「特徴がない人」になることばかりを目指していてもしょうがない。】

…いちばんおどろいたのは、“だらあ”です。“だら”は富山県ではバカ、アホというような侮じょくする言葉です。「この服かわいいね」と友だちに言うと、その子が「だらあ」と答えました。私はなんで今バカにされたんだろうと思いました。同じ日本語なのに、こんなちょっとしたことでくいちがうことがあるんだなと思いました。

…英語の授業で「after school」が放課後と言われ、「何で放課の後に遊ぶんだよ!! 授業じゃん」と腑に落ちないまま聞いていました。…後略…

[田中克彦『ことばと国家』の]「方言がさげすまれるのは、ある程度分かるからである」という意見に、ちょっとお門違いですが、『不気味の谷』の話を思い出しました。アンドロイドなど、人間の見た目に近ければ近いものほど強い違和感、不気味さを覚えるという現象。これに近いものが言語間の関係にも現れるのかなと思いました。行にんべんのノノが平行でない、という理由でバツにされたことがありました。…後略…

私は岐阜県出身なのですが、方言を県でひとまとめにされてモヤッとした経験があります。岐阜県では、「～やお」「～やおな」という語尾を使う地域があるのですが、私の地元ではそのような言い方はしません。なのに、他県出身の人と話をしている岐阜県出身ということ言うと「やおな」によく言及されます。そして時々その「やおな」に対してぶりっ子みたいでなんかいやだとか本当にそれを使っているのかと言われることがあります。私はそういう時に自分たちに自分たちは使っていないしというふうな反発を抱くだけではなく、そのように他所の方言をばかにする人に対しておかしいとも思いました。私は方言はむしろ好きだし、場所によって話す言葉にちがいがでてくるのはあたりまえだと思うのですが、方言がこのような扱いを受けていたり、テレビなどでも田舎くさいと言われたり、ネタのように使われたり(ex. おら東京さ行くだ)していて、もっとことばの多様性を理解できる社会になっていかなければならないなと思いました。…後略…

先生が岡山のことを「おきやーま」とおっしゃっていて、私も静岡出身で静岡のことを「しぞーか」と発音するので、どこの県にもそういうものがあるんだな、面白いなと思いました。…後略…

…「一緒にしんで」とフランクな口調で言ったらとても驚かれました。名古屋では一緒にしないでという意味なのですが、誤解を生まないためにも違う表現を心がけます。…後略…

方言といえば、「方言チャート」というものをやったことがあります。この言葉(文章)言う言わないで出身地あてます!みたいなものです。…後略…

【あべのコメント：やってみると、「岡山県備前」とでて正解でした。むかしからこういうサイトありますね。】

…方言について、私は豊橋に住んでいるが、大学に来てじゃんだらりんに驚かれることは分かっていたけれど、「今日裏に座ってた子可愛かっただに!」と言ったら“裏”“だに”が理解してもらえなかった。豊橋では後ろのことを裏というのです! 日常にしみつきすぎて直せないし、三河弁に自信を持ってこれからも直さずに話していこうと思う!…後略…

私の小、中、高はどこも漢字テストの採点は甘かったように思います。何気なく書いた字を見ても私の字にはハネがほとんど見られませんでした。将来のことを考えたときに、キレイな字を書くことが悪く見られることは絶対はないので、映像にあったように厳しくしてもいいのではないかと考えました。採点で○はつけるが、「～した方がキレイ、美しい」といったひと言を加えてあげることでいいのではないかと考えました。

漢字の書き方（書き順）などの違いで、正しい、間違っているを決めるというのはとても前時代的な考えだと思う。僕個人としては字なんていうものは、結局のところ読めてしまえばいいのである。例え、はらってなかるうと、止めてなかるうと、はねてなかるうと、接続してなかるうと、読めてしまえば問題ないと思っている。止めはね一つで勉強のモチベーションを下げたままでは、結局のところその人のために良くないのではないだろうか。実際、現存の漢字は止めはねなどは考慮しない方向だったはず。

…ビデオの中の先生が言っていた「答えが一つの方が教えやすい」というのは、すごく共感できました。模範授業とかをやっている、答えが何通りも考えられるものを教えるのは難しいです。でもそれは教師側だけの都合であって、授業は教師のためのものではなく生徒のためのものなので授業に対する考え方を考えるべきだと思いました。

私は、愛知で生まれて、2歳で東京に引っ越しました。両親は愛知生まれで、尾張弁をしゃべるため、私もイントネーションが尾張弁になっていました。小学校5年生の時、イントネーションがおかしいと言われ、笑われたことがあります。東京の言葉が標準語と言われていますが、私の中では尾張弁が標準語だし、日本語なのだから、東京で話している言葉がえらいというのはおかしいと思います。…後略…

私は大学に来て、出身地が愛知でも尾張【おわり】と三河【みかわ】で同じ方言だけでも受け取り方がちがうことを知りました。私は尾張方面に住んでいるのですが、同意を求める意味で「～だったやんね？」と言います。でも、三河方面の友人は確定の意味で「～だったやんね。」と言っています。そのため私たちが初めてお互いに「～やんね」という言葉を使った時は、お互いに自分たちの解釈が一般的だと思っていたので会話が成立しませんでした。これも自分中心主義の1つだと思いました。同じ方言でもとらえ方が異なるのは私が知る中で「ほかっておいて」があります。大阪でほかかるの意味は「捨てる」ですが、愛知では「捨てる」の他に「放置しておく」という意味もあります。

【あべのコメント：大阪などでいうのは「ほかす」「ほかしといて」です。「ほおる」とも。】

…学校の先生の話で、先生が小学生のとき関西の学校に転校になって、そこで担任の先生に「後ろのごみほっといて」と言われ、言われた通りにほったらかしにしておいたら「なんで捨ててないの？」と言われたと話していました。…後略…

【あべのコメント：おたがい、自分の理解／用法が当然だと思っているので、え？ってなるんですね。】

…わたしは豊川市出身なので三河弁を使っています。隣の市の岡崎市には「東海オンエア」というYouTuberが活動しているのですが、彼らが上げた動画の中で話している方言だけを集めた動画がファンによって作成され、上げられていました。三河弁と言えば「じゃん、だら、りん」だけと思っていたので、自分でも標準語に近いと思っていました。しかし、その動画を見て、自分でも方言だと分かるものもありましたが、半分くらいはどこが方言なの？と思う場面もありました。…後略…

どこの方言なのかよくわからないのですが、私の家では下に沈殿している状態を「とぼっている」と言います。例えば、ドレッシングが油と他の部分で分かれている状態を「ドレッシングがとぼっている」と言います。…後略…

【あべのコメント：「とぼる 方言」でウェブを検索すると、いろいろできます。】

TwitterやInstagramなどのアプリによる情報化社会が進んだことで新しい言葉が生まれたと思う。「ウケル、草、エモい、萎える」などだ。これらの言葉を年配の方に言っても伝わらないだろう。…後略…

【あべのコメント：その「年配の方」というのも、若いころはそういう語をつくりだす主体だったのですよ。「エモい」なんて、「ナウい」と同じような造語法。「ナウい」は、わたしよりも上の世代が使ってたことばです。わたしの世代は、すでに「ダサイ」ことばとして認識していました。流行語は、生まれでてきては、すたれていく。そのとき、そのとき、たくさん共有されて、思い出をのこして。わたしがこどものころ「やばい」というと、「ヤクザみたいなことばを使うな」といわれたものでした。】

…少し前、アベマTVで結婚をする意味がわからない人と結婚をしている人が結婚について話していました。そこでは、会社の上司に相談したいことがあったときに、結婚している上司と結婚していない上司だったら、結婚している方に相談をする傾向があると言っていました。結婚をしているかしていないかで、人に優劣を無意識につけていると思うと恐ろしいし、日本人の結婚の捉え方がわかる問題だと思いました。…中略…漢字の形を1つにした方が教えやすいし、生徒も混乱しないという先生の意見があったが、数学の解き方がいろいろパターンがあることについてはどう思うのか疑問に思った。…後略…

障がいのある人と一緒に出かけたときの先生の経験にとっても共感しました。私も障がいのある方と長久手のイオンやお店と一緒に出かけるアルバイトをしています。その時、店員さんは釣銭やはしが必要な時など必ずといてもいいほど助者の自分に聞いてきます。そんな時私は利用者さんに「どうしますか？」と聞くようにしています。昔ボランティアに参加した時車いすの人が同様の件について「なんで俺には聞いてくれないんだ。物を買っているのは俺なのに…」と言っていました。私も福祉を大学で学んでいたから違和感を覚えました。こうしたことは普通のことだと思っている人もいます。…後略…

東南アジアの授業で、ラオスという国が独立するときによく似たタイ語と文字などで差別化したという歴史がある。ある国の一部が独立すると、それまでの方言が国語になることは多い。しかし、そのような国で旧宗主国の言語がエリート層の言語として残り、社会進出するには必須になる。こうなると旧支配者言語を話せる人が収入も高くなり、現地語しか話せない人は能力も収入も低い。劣った人と見なされる。この状況は「言語の乗り換え」を促進すると考えられる。…後略…

【あべのコメント：『マダム イン ニューヨーク (English Vinglish)』という映画がおすすめです。インドの「主婦」が家族のなかでひとり英語ができなくてバカにされてしまう。結婚式の準備の手伝いをするためにアメリカに行くことになり、主人公はふと英語教室に通いはじめるという物語です。最高の内容。】

おまけ：他者への期待と支配欲のはざままで

子育てや教育など、どちらかにだけ判断力があるとされている場合、「相手を意のままにしたい」という願望をもってしまいやすい。「このようなときは、こうするものだ」、「そうじゃない、こうだ」というように、一方的に相手の行動を制限し、どのようにふるまうべきかを教えさすことがある。そして、相手が自分の話を聞かないときには、強く怒りを感じ、声をあげてしまうこともある。そのようなことは、友人関係や恋愛関係などでも生じることがある。だれしも、他者に対する期待がある。それは、「こういうときは、こうしてほしい」という期待である。その期待が過剰になると、問答無用の支配になってしまう。

ここで紹介したいのは、「「コミュニケーション障害」ってなんだろう」というコラムで紹介した自分自身の体験である（あべ2015:65-74）。知的障害者の施設で勤務していたころの経験を書いたものだ。文中の自閉者とは自閉症の人のことである。

わたしは、自閉者と接するようになった当初、「なんてこの人たちのコミュニケーションは自分勝手なんだろう」と感じたことがあった。それが「わるい」とおもったのではなく、ただそう感じたのだった。

そして、しばらくして気がついた。なぜ、わたしは自閉者を「自分勝手だ」と感じたのだろうか。それは、わたしが「このように接したら、このように反応してほしい」と期待していたからであった。「このようなとき、人は『ふつう』このように反応するものだし、それが当然だ。そしないのは勝手だ」。ごうまんにも、わたしは、そのようにかんがえていたのだ。

そこで、わたしの頭はひっくりかえった。「なんてわたしは自分勝手なコミュニケーションをしていたのだろうか」と、むしろ自分の勝手さに気づかされたのだ。文化人類学の用語でいえば、わたしは自文化中心主義にとらわれていたのだ。わたしの常識は、自閉者の非常識であり、わたしの「ものさし」を、身勝手にも、おしつけていたのである（66ページ）。

発想をひっくりかえすこと、視点をずらし、ちがった方向からものごとをとらえかえすことで、見えてくるものがある。自分を「ふつう」に位置づけているからこそ見えなくなってしまうことがある。ちがいに気づくこと。そして、自分が当然のように思っていたことが「あたりまえ」ではないことを知ること。自文化中心主義は、あちこちにあら